

玉木 優 委嘱作品

# ヴァーミリオン・Vermilion

テナートロンボーンとピアノのための

ヴァーミリオン

作曲家：ジェフリー・ゴードン



「私はヴァーミリオン（朱色の金魚）になっても構わない。」著名なフランスの画家・アンリ＝マティス（1869-1954）の言葉です。フォーヴィズムに見られる大胆な色使いとテクニックで満たされたキャンバス。ユニークで鮮やかな構図を用い、彼の探求心は特に色彩の世界へのこだわりがありました。画家・ポール＝ゴーギャンの思想を理解していたマティス。マティスはゴーギャンの絵画について生徒への講義のなかで「この木々はどう見えるだろうか？黄色がある、だから黄色を入れる。この影は青っぽいからピュアなウルトラマリンを。ではこの

赤い葉っぱはどうだろう？ヴァーミリオン（朱色）で。」赤やオレンジではなく必ず「ヴァーミリオン」と表現したのです。

ときは1912年ごろ、17世紀に極東アジアよりヨーロッパに伝わった「金魚」が、マティスの絵画の題材に幾度も取り上げられました。金魚が描かれた絵画や版画は9点以上に登ります。マティスにとって金魚は平穏と楽園のシンボルとなったのです。モロッコのタンジールを訪れた際に、人々が金魚鉢を見つめたまま、何時間も空想にふける様子に興味を持ったのがきっかけでした。彼の絵画のなかでは、ヴァーミリオン（朱色）の色彩をもつ金魚がひととき目を引きまします。その明るい赤のようなオレンジのような、鮮やかではっきりとした赤と黄の色素が混ざり合った色。周囲の青や緑とは対照的で、それぞれがお互いを際立たせています。

1912年のマティスの絵画「金魚のあるアトリエ」は、マティスの優れた色彩感覚と手法、彼の言語を描写した作品であり、トロンボーンとピアノのための「ヴァーミリオン」は、この絵画を基にした音楽的描写となります。この音楽は単一楽章で描かれ、ソロトロンボーンとピアノとの対話を通して、きっぱりとし且つドラマティックでカラフルな音楽言語を用い、マティスが探求した牧歌的なパラダイスの映像、鑑賞する者にもたらず默想的な安息、そして彼の複雑で強烈な絵画的空間の構築を表現することを目指します。豊かで様々な音色を持つソロトロンボーンと、ピアノの深遠な音の世界が対峙することにより、マティスのこの官能的傑作の色彩と質感を表現します。

\*\*\*\*\*

編成：テナートロンボーンとピアノ

演奏時間：およそ12分、単一楽章

[www.geoffreygordoncomposer.com](http://www.geoffreygordoncomposer.com)

[Image: Henri Matisse, Studio with Goldfish, 1912. Collection of The Barnes Foundation.]